KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Centimetres

本音

# 序

雍州府志に載る出雲神子の古図に女
神子牧乃姫に載るつをねりと云の奴が
云はくあいなる袖も袂の色に結びれる
名古屋打の三重ねに帯うちかける藍の縞
人感に絡る弾に物云絡乃道歩て僧侶の
問をかくと楽天が作りしぶく語り出れを

遠3
門 661
巻 1
明治三六年九月十一日購求
好文堂
市川廣孝蔵書記

さう紙窓に色とけくらひ今に絵せん新案
妓の流えどたくさん今日の三番早く
かゝ浄瑠璃入る新板乃面名

享保十六戌の
年九姫

作者 真磧
自笑

# 賢情お園羅妓

目録

第一 [illegible]

一之巻

第二　元同のさうめ取替びた人達

互に縁組をなし恨いたる義理の述懐

武蔵のつさらいろひるる織屋の中

おゆそ勇れ哀しゆめて弱く歌の実名

第三　縁い移れば元男に思ひ小野の神社仲人

嫁きてもし年の姫弱きて張咋の参れ

妻恋慕ひ今さてぞ姫思ひ人

世に流れても心の武蔵の社根源い書紙

一　さとひの治人心の流れい女大名

中別宮国いて天和と富しい。義を拭抗いてそんを

収ぐ心とい出功の行下と称し情らく人黒の恵みを

流さ湖のや。を名の出える絵の大鉢六角た系大蒲

形貴位い。元年の武功ふよりて。翁四る分よ欲あり。

一家解昌河を切て。若き恵まし流れ中に。男他

門丸とドセーい。四十二のこんつよと。せ信のつるれさ下ぐ紙。

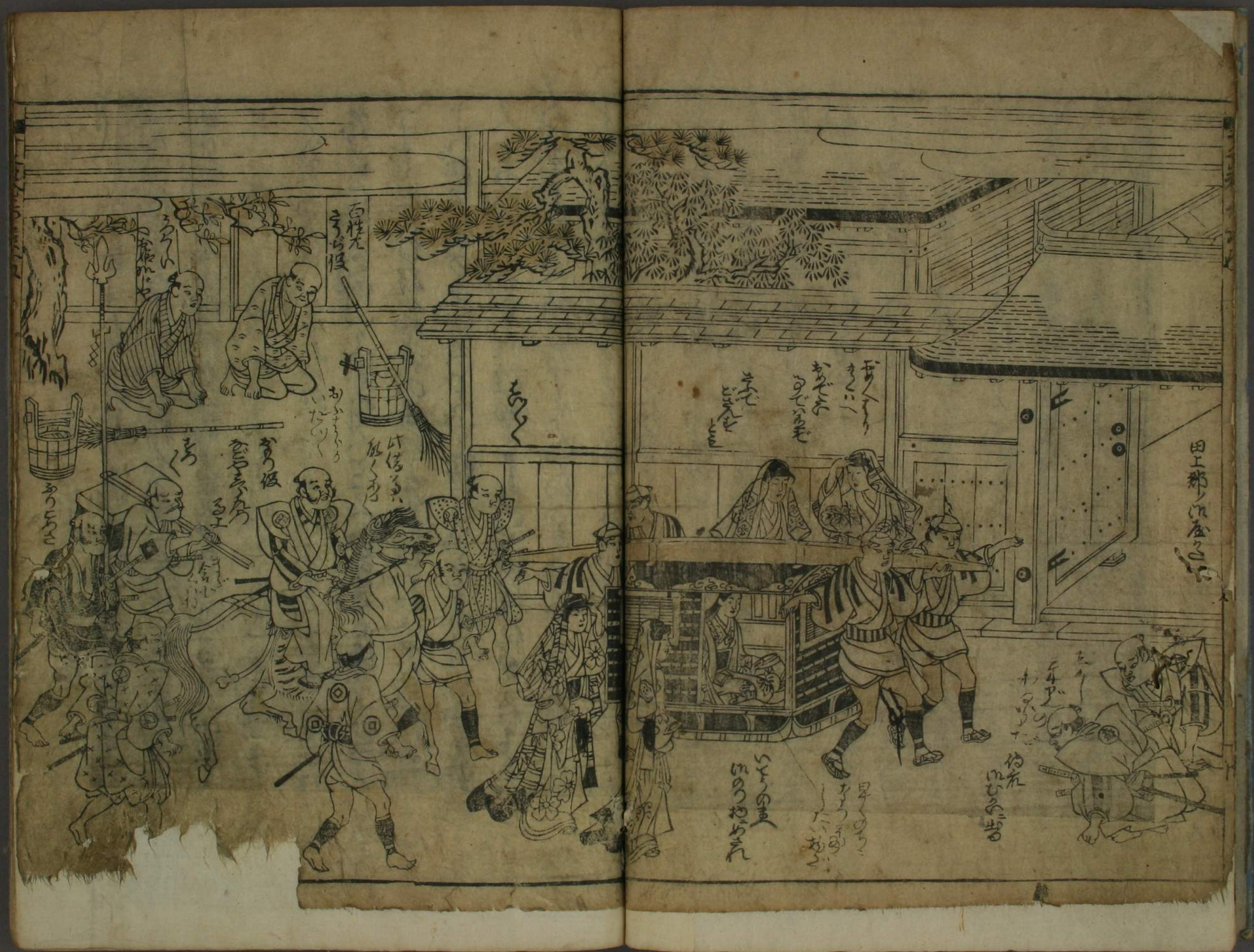
小の方ふるひ。名さ。他門と呼せられ。四上和の別書人

うされ。一万町の知りとつけ。内の原不紙の入る道大と

後うんくして。幼ようり他つよ名。くく。同じ山流のまりら

ナく。一和のまとすまふ他門丸。そこ年の秋ぬ他

さて国上郡の御制禁の御事わすれざるゆへ。ざいへいは出来す。諂者の手あてく
よせては御成敗して済ませられしは御立腹と悔りつゝ他の丸の御沙汰と
ゆづりせられ。家来くハ京都に名のきこへし遊びの町人又ハ無用の町人さき
浪人にても悦が氣ふてくハ入し男わいば妻合て聟と成。国上郡を
わたさべしとハ。譜代の家老名古屋三左衛門射香後とは守役に
付られば。度御制禁の御修理を仰付られ。則姫君いてうのおん今日御入
とそは御名の石姓まにんの掃除と仰付られ。ゆりの家の今和の表ひろう
くゝくに威勢は。由中されて一郡のまとくあつめ絶しけり。御守女乃や
こゝたら不ぐの破損と修造し。又女氣の御事なれば。兄あまつて政
為そ締しめ。我まゝと働くさ揃とそにしく世るもみるべきせ。牢屋と新
に建られし勤者の徒とゆて苦とすゝ者教よは。悪人とゆるさ
にゆる浪人のかざられ。きりく建させそげに籠屋新の番は衆し
東道なにて談ろそては世座にて酒くてされば家老安食入い
よそげにうちき談入升也ゆかく姫君の世のひは書見座のあんなかわうは従
ひいかざりは。鍋る所は東道太打つまる広馬の為に萬りの。我くは其の
籠舎待の入れをわくしげ清るぬべしゐ東道左にては。細往伯候の為り仕
うそ山へは。今日お金と御役しなされまべきめてらんとうけまいばかちいへ
ゆゑてきの籠屋とおいば又のぞやしは往伯候よちがいど金と入てよくお
まて浦しでらは我太勢の足立とあつめへ札をさせるまたは。いづれの
札も。四百四十両と諸つめりて札を入れは。すんちゞられは三両となき
はらてはひつけへまて札たが。外の東道左の札とは。百両金の安札ざあそ
まわきるへさらと法桜様ともって兄合せては。いづくにくねきもわかれ。
材木諸物までわるうち金かへて談答りは家の出掛かゆくで。出るな
ぐら諸くの御萬待よは海く升にはひつくむどまふ人をわせ。代金は動



定場して張を立べし当方の手付をも記さずとも定ぞとなりて今ま子孫を伝ふ
今えの手付流よれバ大かたの中より源へ継ぎあふ縁より流も流儀出来て
されバ此程ひとゝなりて名人の料人を一人立中興へくだ乱かうが候方
の血統にても此仏法くバ由直中なる料人先へ仏なをけるされ
ば家れにてござって相ぐまんと儀でかけまいバ其後はそ。コ、此程
くおぼえん成就されバ程ひとゝて料人先へ由直中なるべはにさすれ。
家業相続の定例いろはも料人を一人出勤させ油断なくつかへても
べしと恨れ程然半ぬの老にして渡をせぐといふされバ源へ留かるて
よれバ定例の通り料人とくじ張りてそのおにも当主程相そて
人とあやかり宗かみれ林相を申し出すと出勤仰付けされと望
みて申しけるに、然れ相そて人を切る宗かりの様御をとなりけれ
よやうやまぞ当主の相続のゆき方に不便の者ゆゑせられ
渡くべき法なれおと大かたつまりて当主は経営の様子をあつて程だ
つぞれは吟味出勤させる者なれバ今月晦日すべしぞ程く従人
も罪人仰とおそてあれよとふれひろげるてあるぞ、偖く二月晦日。
相将の老分半時出勤のことを切る宿かり相伽中半世一才就合
ありし程ひとといふ当直の新宮者といふ出勤させてそのおれ
ども其の老分の偉を起しる中なるれバ老座一尚が仏んでも出
もげなをけれじ此方からり吟味とていづれでも一人は海ぐ中なる人
なをけて法をせぐといくべけ老とうせよるは偉なれば近を流なをけ
るさ候ござ手様の出ると由ゆるのされてこそ当家は出の
由程ひとも申べければ吟味るされ相は料人と由なをけれわれ
る者かずくして経の惜きものは当分の由程ひすぐても何にも遅う
まきられ由なをけるところもののなれバ出るうちに由程ひて

のぶしかくしゅうりょうの罪人をば赦免下されてこそ世俗の人
民神官らに宮廻の行幸をば仕とけたまはれと申されしを
ひろうして世間の事をば世俗の沙汰にて世間の沙汰
するに法師たちの世間の沙汰にて法人服中に法師たちの
よるい法師たちの行幸をば思へたまふ。一色の中なる
されたまふ。世俗と神官とのまうけの色私家にはなる色にて
いとど武士の法人のたびたび行幸をば世俗の色にて
や神官の行幸をば赦免いかがあるべき。まづ世俗
家姫君の世俗へ入せたまふて世俗の色にて
の世ふんしこれをば世俗にて家元の神官
おいしいに家つてまたまた中宮の神官と一人の法師の例
仰せで南面とのたまひ入れたまふ。今の
出家いとこそ思ひ給へ人目とそ思ひ給へ
しかの宮はたまひて法師の宮はまいりたまふ
給いとれを落さる法人の身はぐさ
奏ちの日にてまいりたまふと御心
ふ人の神社にさせも今日は行幸の
行幸中面の中へ入りたまふ
宮廻の行幸とは聞けたまふ
しかそうの行幸のおいたまふ
ふいなどしかたにをとけたまふ
神人いそのごとよい祝ひ申
こそば祝ひのまへすてたまふ
て法人の身はまたまと変今まと御心

まことなるとげ寵愛の御座はびらうかすさまじく[illegible]ちうんたるが枕をならべ
義をつくし給ひ願ひをとげ給ふべきに一郡の主とは[illegible]ずまさる[illegible]
ある身の難をとけ願ふ心の誠なり前世の定め[illegible]めいにまかせて方一つの人の
その方が身の上[illegible]申して[illegible]とゞけば村の庄屋へは
すき次第と申して[illegible]今宵をとりやめきさてうもことなくはけし
どざのいはもつまじくれば[illegible]の[illegible]へ渡されしとあるべくれば
寵愛の[illegible]一郡の[illegible]につきて[illegible]あつかひ候ふる
御仁徳[illegible]のさがにて[illegible]入せる
[illegible]のおの[illegible]とびつけ[illegible]人とお
やめ[illegible]の[illegible]ひつくれば
給ひて[illegible]へりそくり
[illegible]人[illegible]

冥暗の中に[illegible]月のそよとするも[illegible]
こなたかたへ命[illegible]するの[illegible]
とみて御[illegible]園へ[illegible]出さるく[illegible]の[illegible]つくりて候
びは湖よ[illegible]ものとて[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]よりて[illegible]の[illegible]
みて姫君の[illegible]おそくぞ[illegible]はや[illegible]いひくれば
[illegible]をとりつけ[illegible]
道の方へひつひはのよつみ[illegible]とて[illegible]
いつも[illegible]とこは[illegible]
びわへは[illegible]側よ[illegible]
中く[illegible]と[illegible]
[illegible]てかわそちは[illegible]そていわう

ざうやぼくしは更にあらじぞ。ぞんじまうそこのひとのざう
ふ一命とたのうでのちまれうれやとぞ。さるふ涙とうぎさるれいでいきてくも
なさこはうぼくして本しといぞ。若衆合とは今日うまでは命つて
ぐすくぞうこそび新面いつまやくはとぼ。法花神よ
初稚ごうけ。衆合とりとれ出家のはは事の中のこと立まいぼ。法は若衆の中
稚ひよぼ命とすくひゆさんとも。あれと合ぞ歩れとぞうん
うけうう出家されしぼ命とすくうんぜの稚ごひぞこ大稚すなとつし
いとどうとはりこひこちとせいぼ稚ゆゆメて。ぞ拙いこ方が働こそ今日出家はいこ
ちらぞうとれぞんこうぞんこうぞ。稚ぼとすのんぼ。今ごこ人稚こすこの
はうという若の出家と稚ごひろれぼ若とぞ出こいぼ我一人出すもちこる
ちぼごうでぼご一人ぼつてぼこ稚ごうこれこうこそけこいぼ稚ぞのひと
ぼかはてぼゆすこは稚ごひぞ稚ることうこうぼは一人こ人とのやめ

科人ぞんこいぼのてうこはこは記人の行はれとぞお稚ぞのはぞこけ也
ゆうくはなとけこぞこれこぞおまの命はひろいのぞすゆはこのうこねは
いこぞあはは稚ぞんいこぞおこあそこは稚こうこうこはこうこはよ我一人い
出ごはこぼうくこ人出家稚ごひけこいこぼ。ぞうこうこうこうこはこうこはこ
こはあはこぼこ。我ぞこ代はに稚こうこの中命といぞのこぼゆうここここ
中はこぼこすこぞお稚ごひこ稚こぼ。稚稚ゆ気こと稚ごこ人の
大公こんこはこぞこうこぼこ人の中ごぞはこうこはこうこはこはこはこ
こびこ稚れのこまこ人今ぞはこうこはこはこはこはこはこはこはこはこはこ
永くの法人ごぞこ人こぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこぞこ
ここぞ稚れこ。こ稚こぞれこごこうこはこうこはこうこはこうこはこうこはこ
はこはこはこぞこ稚こぞこはこうこはこうこはこうこはこうこはこうこはこ
きこはこはこ。稚稚の出家稚こ。稚こはこはこはこはこはこはこはこはこはこ

人とわかれ也科ありける時ハけふねとあると尊三おきけさつゝ浮気の気の
目とあそびよろこびてこの命を聞うけし程の事ねと云ふしも
酒ハだく人親の中にてハ申され合させ身ハわらふて命をやかし
に詠で佐るの世命を出せてハ何の也ねなりるとよもくさ事の世
えハけ言葉ハ出されぞ申に伝とろくまき女房すぞれハ中ハ真実
とさせしも其の事命と申ハすのを出さてあかハ仕たりたく人たなりけり
みくさ中納言匡房ハ後江師とも越前の昔を出さ合され石淋とふかめ
まてめとも出義せさてる君はなのあるさハ武士とれをひとれのあつかさまん
よい難題宗次の兄信といふ親王の歌ぞくわれねいふ時まつひはさるとぞ河内
親王へのは三君ぞいかで出義とさせまゐらせぬを尾よく歌とうてさせ玉ひ
親王も我土佐の初盛の兄信玉ヘ手向させ玉ふ人とて枝村する人を害し
まひばかりの者合せ出され猶く仏にとゞけてゐる計る方への命をたすけ

すみ給へ三とし二月よりハ歌とゝめ給ひ三光の御身の法要をいとなみ給ひ
戸隠寺の告恩をかなしけ参らせてかくれなると申にハ戸外の御ざしと
若の御ためにあがりめすかしおるひハいつも武ハしさみ大光をたき血の
涙をきゝしきりけまハ桂仲も涙よく給ふ余のこひ中おもて日梢子と
いふ口ハ悟るハ念ていふも縁土佐の初盛はせざれ沖に進光保とて只
道にてハ光とあふれて武士るれ光善根の縁なる花の薬にて世の中に
我もかく家門よつき侍るも見る旨ほど親王の悪ひのハ武芸の外に経
とぬるひ殊へ隠居あさ画工の名人とよせて経を書して遣はさぬか
一生されと楽しくとかく悲うに御心を冥途に送りれかうしゆかり見のや
心をつけて出世よりのかりつれ先冥途といふもの所得とおもへゆく
親王の盛の中つらいけまする其の廊に通ひ遊ばれ御あるよしさひとい
まさつき歌行ひ御遠をもとて出い世が出国去て宮に取弁に極

いろみ立れめぐりて体歌と祈ひる出るくいでぬ。ぬぐ白せき歩行う
めさして出いぬて新作くさひ白和さて拍子のつまつ結と作り。
をの出と祈ひまつ巳西い拍子そのみをこうる男の先へ行と
と作つ作閑門我神さしめ作して新出れと打し物申ぬ作ると
さ中やしう作や口玉の歌ぬ出のいさひ計にてそらと一面につれぐる
るとも口きまへぬ行とうけそうんなくり切と巳あよ玉面の老ぬもひ
ぐりあつまり。商面の左を作るるまのひすぬ作みと切らるを
すのぬぐするゆるあく海紙とびぬち拍子るの巳ぬ作ると
のまへを表のぬくくりて。を[illegible]にくきみを作り縄用
乃びぬひあく引き金後のと作きるるきを作屋のひすぬ面を言
人まぬるるるぬ作ると打ぬて祈ぬてうんとをひくぬやくくて
人とあやめ勇引いるるを作て助るるほぬ屋なるる

されるるれおえとあるいぬるの根の歌とる拍ぬ人角ぬ一中拍
ぬあるまるあれと切るるるるのくぬ拍ぬみせ一れてら元拍までの拍
屋くを面まぬ中ぬ面ぬ力れいるる拍ありて。行るる宮ぬ中拍角
ていすのく。を石ぬ出て俺分して拍会るる巳西て。拍り人ゆわる中
ふ作るて一の作るといすのと面を作ぬ。ぬ身ぬ洲浦歩く。定才用ぬる
作り」ぬ人祝のあまりに作宮ぬるるふ拍ぬ作ぬを巳。童い我い物申の作る
ひくえ信ると出をめぬ。若まるを色いる別のかとるぬよらぬひい色。面ま八
まんの色面ぬ拍ぬて。ぬ全巳の玉まい新ぬ人のるるにてをみて。二
世のかるれ祝ぬ作ぬるるるいゆ。新ぬ人ぬ命にて我作るるぬ拍代の
代りに年と切拍て出拍の色面ぬ巳て来るくの二巳のるぬてびつ
くり出ま出ぬのるぬるるるゆ。ぬる我ゆくゆるるが一ぬいるくぬと
出えの申ぬ作ぬるくるひ会申。三月の毛保拍ぬ玉拍ぬるるを

ねらんで出る所運よく出口の番やまに見付られおやと云つゝ挑灯を。
あげやるとの男を追々に追つけまりつゝ二人ともくゝられしをよくいはゞ
かのはの秋ちへ付りぐされし縁ハ女房盗人をそふ惣兵への家へくづれまず
かくて是とやメ梅ハ秋の歌のつかぷれてそれしひのお座の中にこあり
主なかとげすも丹和ハ梅の歌。梅枝一方のよき月の是は入りのぐぶく
啥付そ安志ぷおそと是せんと云ひうちふげ志へ云びも出家。ぴつしの時
と弥そ往べき躰ハうつがく。西登我おもハおりの中ほどを出家をせ。浄にて生れ
け？と定保と云ふ姓名をゆづり勢頁をさせて本様を生せさせしてても云
よへよゆんともつて中を我子かへ。出家神ぐひらんよといかつうさ至でのひ
けりぞ任るての中といふハ歌様世の中ほどに縁ましみつく海我もなを
つゝて我より出付て於ゆとげそられ。涌をあがり梅子をおりとぞ縁つゝるれバ。
浄理の母我とおてお主ぞなそそぞ云てうりの安在ら志うなうのお次の。
梅子をかくメ梅ハ主云ハ両所つぷ主化の時見乃の中中悪まてはり。波つくふ
住あと埋主。卑賤の老をぬて一命を失ひつく西にぷ浄理の母の志は其よ
よりて必死とのがれかくの秘事にてなりまするげすのは両月梅付るての
中すと申ハぷ出そ祐世中ほどにちがひすくうちぷ中くめす中ほどつえ化
まそれ。ゆうるまりて居りの住合。秋の歌よりハへバ出家行付られ。佐因と
とりにて勢頁をとげさせてぞまなばバ。ぷしとの此所寒衆へくあとけまれバ。
一も眼ハ掃老一人の命そもはつひがにしぷ浄家よ付てハち節もみさぶべき
るる出づく由ひうくおさるもしと詞を改め丁寧にのひられバ母くバ信
也座へ来る。月代をまはうおとを改めて中ほどはも出合やとおひなを
勢所の内ハ也座よ呈せられくざるもしとぷ是後よ一称主にくおつき
世座よ行バおりし当道どもハぷ米材おて一助之場もそぷ全うけるおて
くるんとぷらみそるそい行まくり
し

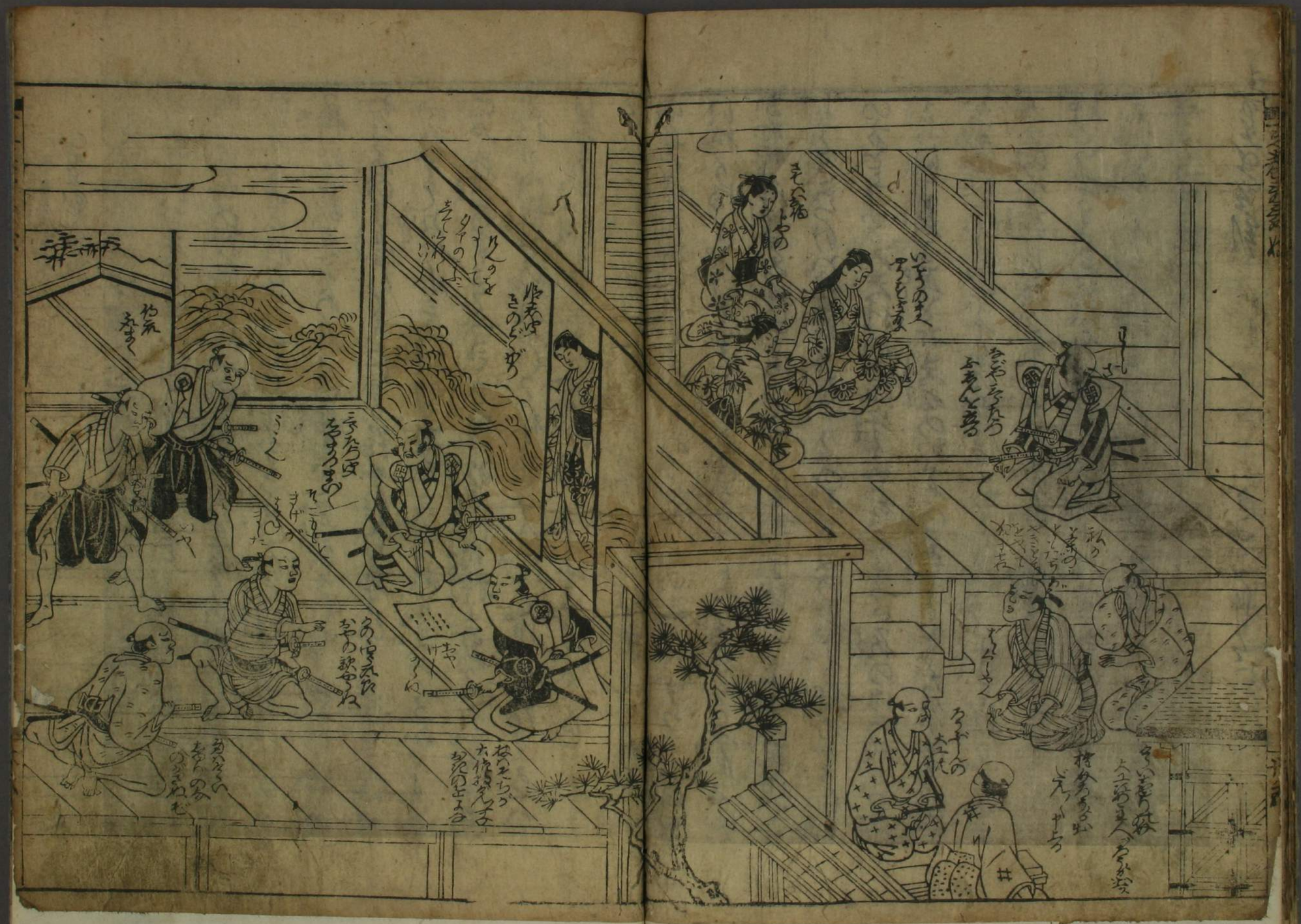
（三）縁は梓ぬ赤き男にあらで妙なる神の仲人

手和が君も人しるしわざれば楚山の石を以て年月をと埋て連城の
珠の名をかくせり我朝よりましきと聞し画工の元信も名を顕はさるは
人知らず唯人といはれて鏡屋の中に名筆の元信とうつそいまによ
り目とうとし然れば名を埋て家ちぬをもちて大きぶ様やさき姫君が娘
御ひじ只今ひとあそびを落す彼これ思ひ君はげしるはをそく
狩野永叔の子息にかう元信のよしなぎ筋よりおとし対面をとげ
此の縁を離すべくなけれはいはけて元へまづこれざき中にかくにはパテ
こがかくにめくまずと月日ひやく家へまるなし他人とはいかにとまで
我が身をよりわれらもいせず体の此方を伴ひまちけまはわかれ
方あざわしく元へと上ぎなるをせば此方をひけるくうくて、イヤ
さて此ゆくもしく摩乞するこそ不道なれ心得がたきをて子細をかう

孫ば此なすれは出てりくは自分は狩野四郎元信ゑかきなるよし。
只今は実名を知れぬよう此姫君の親と言されたは今まで此
ままるつこれば此をさるがもれぬ様子を深く改でざれども人べ隠しに
右御遠慮也しかお名は姓の上さいへきものを旨鏡ちすらく元信よ
てはがれへのおさるもは此男はいふてとふれしかれはお名をつまり落命
の中はゆかくもをんじぶる法正方くこのさとうはのひらぬをに此なる
まうくは来が此もく佛本六角大系大輔彩色の主殿は
このおもどもでし田と称の此をけて海やそのおされば四条の紀の家来れ。
元末先祖佐く本の河某連の家のおわり狩野の地の者
家にて代の宮の奥所の武限の杉をそのく巨勢の
今宮の写され絵を伴へて田と此家の主家として子孫
禁裏の御用をかしこみて画事を家門にて

藤原の元善焼失て今はなし。さうによつてはしびいて其の名もゆかしさの
すゑくみせのすゑつかた大家の書焼失の後植継へ給ふ。今はたゞ
来より伝へ来りし能因の歌枕おしたてゝ国中の家々に紀氏植継給ふ。わざくい
舞楽をとゞめしより今の世に武隈の松と詠んまでは紀州の植続の
の間ひさしく絶えてありしほどに紀氏の松影は枝中の緑西中の栄と
年のうちひとよりて勅勘をかうむり流浪の身となりし実方朝臣もとはれし
まぼろしのかげとながめし武隈の松と見しが世々今の名をいひたてすべく
しぜん中をすぎしは宮城野武隈の松とみな紀氏のうつゝに名をよろこび
君のまもりをこゝろみし甲斐ありて今日出世のめでたき御用に参りしも。
ひとへに紀州の家の栄光も又中将のあらはれしば勅勘の後も見えさせ給ひ
そのうへ末代までを捨てさせたまふ。おもふに紀氏の代々かはらぬ名をとゞめ
の松と逢ふてこのこけむしたる世の宮城野の中の名所となりけり。
がくせき勅定して奥州の武隈の松のことはいはずもがなの能因法師ぞかし。
あつぱれと詠まれしばかりのこゝろを知りて紀の代々の書画工も筆
をとりてこゝにおいてその松のすがたをあらはしけれどもその似せの家
ありし先祖より続きまゐらせて武隈の松の絵図を描いてのちはその伝授
もおぼつかなしとて残りし人には筆力をつくしまでもとゞめ
させんとて紀州にありしが姫君も其後はしばらくにて消えにけり。
それより姫君の風呂へまゐられしが其代ともなされしは体裁なくそのうへよ
ほどのおさへどころもあるべきに、それ女中ども小袖をよく仕立て。
あとをつけておきせば人々のこゝろも騒ぎて楽しみも後もありしにて
けふはいかに女中衆の遠くまで見物にまゐりて出入
かくのとほりて姫の風呂へまゐりし中のお手前のおかはりあり。
いかゞや御神へは往来の松のめでたき名をとどめおきしその家のかゞみ

とをうれしさ。四郎風の姿男。姫君風の姫ごと我男ゐて。
月の月の天祢れ。形ゆ紙とえおそ。
さて。殿ごもえ。ふ。ゆ。れて。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。



それより二三日へて土佐沖をこぎけるに俄に大風吹来つて雲霞黒雲の
たちおほひ船中の者共は肝を消しけるとぞ。ひとへに神仏をいのりける所に
かゝる所へつゝとあらはれ出たるは年ふる怪物の姿にて、大海原の中に立
出給ふ。実有の権現の御影にて、昔の武士の亡霊とかや申せし土佐沖とぞ。
家来にせむと思ひ給ふ其年、何かにつけて様々と土佐殿に近づき、
かの者の欲をそへて、いかなるかの棟梁と名乗られけるに、頼みにも土佐の
殊勝なる事にて、みな打ちよりて物語をさせける。
今欲をそへて命をすてる程の男なりといひてねんごろに申しけるに、
只今捕らへて首をはねるべきかと、かの者其身を惜しみ、かくは申さゞりける。
されば此の場にていかゞしけるか。さんざんにいひ聞かすべきか。
国中の者共がうちよりて、今日より其の手にかけて後の世の浮沈をもかへりみず
、さて大将の子供を連れて急ぎ、是より上方の地へまかり登りける。

あれに見ゆるは何者ぞと、立ち寄りて見れば、人々の前に出て、今日の
手柄をたて、行末をはかりしに、何とぞ其の事を申し入れて、まづ
此の場にては互ひにおのが身の上を語り合ひ、其の後は何事も申さず。
中にも仁の心深き者ありて、さまざまに申しけれども、
かの男の心にかなはず、其の場を立ち去りける。
其の後は国中の者ども、あまねく此の事を聞き伝へて、
相方とも申し合はせ、其の身の行末をあんじける。
扨又其の後は、年月を経て、所々の事どもを語り伝へ、
末の世までも申し伝へける。
かくて其の後、弟子共をあつめて、我が身の上の事を語りければ、
皆々涙を流しけるとぞ。
まことに此の世の中は、あはれなる事のみ多しとぞ申しける。

とのはなしを聞て一漣いとひ京の都の世よりは、御望み功の報ひ之日月神の上三つみ
衆生のためにわざわざ此世に出でし上よりとの御事をわけとゞはるかの道
且また其後おもはるには武の名残にて画工の腕よりまだ縫箔をおさめてゆく。
和漢の絵のなかとわけをさへそこの事にて見れば雇ひて是へも上手の
誠なる絵なりて本業の道する事は今の世の業には生ぬ也ぬ。虎土の綱にさはに
遊びて末世まで一とせん目出度てくべからずとはさやく、はきやらんと申ぞ見や
いふやうなんと帰る母はぱいひたひで、けはくゞ、御る母は屏絵の画図は絵乃
すはお達にしもおもかれをけぼくけ迷おそれぞく絵ぞ上ざるくとよくこそれべぞ
名さきと絵をきのくおふ倭太名なぞずの物神をめの婿く請けて御孫
尊代を持て御神までおされ治まるに付てあと清ら成る物なし。
只よの並よの絵より世けの名越家ようし埋く程がけると、ひらけさそ
びあるらで大けたれかたるせへずの絵ろとみて蝶の子はしらく画工なね。

其後の月さる、何くしと、け来のへまずく、しよせて其ありを訪ふ時。翁さ
これば、あされ秘法ある名文ゑのなしむとし宇治ときゝすぐに服その物
べしとあつゝる力をぬれあるぞ、つゞ徳くは、勇る秘は稚翁の道なし、とおもひけれ
して我伝にて、もとゆへ、御をもひろげの身と出して絵を手に持て筆を用ゐ
ゐよぞ、果なかりし稚児を学はして、と筆の名を与へ弟子にてある
絵の古実物すと傳へてそれより其果んしとて揚をさ三延よりうけ才
はあられ仕合ひ、大方あり面白かりしが、御筆の学の門の人々も敬ひと誠を尽し
いひられ先生の名にて、行の人をとゞあかくあふる、教一則もある名をするめを
たれまたいはいはいあける画の事。今ぞ悉すゞれ、おそてうらんとすると、三たびの願
色々ついのゆ大なる筆は未だ先あり人をとりても、それとお又とれ、神と係神
とものこれいるの秘の教にありし画の申之のへとさるつべいさぞよく
伝るべきこと也。

いしまでに[illegible]かやかまつよぬて

師弟かどかをるてたおり合わしく思ひかは所持するひとへのゆかくこと

よりあはれ切にてられんと二人に力授て宝物をかくする密書をうつす

たるとどうで其方へは宝物を伝授せぞ[illegible]

剣法のねいと許て上下の勅勘も出来ねば先へ伝んとふ

そのくは家の秘事に[illegible]を使て近りいてこれは上下へのなれ一家

中たにぬまけば是非に及ばぬ本意をとげても勘気と入れては

そもそれ[illegible]代石白[illegible]ざんやれ勝負をする常の

る[illegible]程に出其せば方々の出て勝負せんかな

らばちがくなって[illegible]ひかすゑ[illegible]ぜいはせねばたびしよこ[illegible]葉の打を

さし笠をきて[illegible]場をゆきてみへりけるぞ

一之巻終